



Title	日中バイリンガル環境で育つ幼児の二言語混用について : トランスランゲージングの視点からの考察
Author(s)	王, 桃
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2024, 20, p. 54-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

日中バイリンガル環境で育つ幼児の二言語混用について

— トランスランゲージングの視点からの考察 —

王 桃 (杏林大学大学院 博士後期課程)

taozi0420@icloud.com

Languages Mixing of young children growing up in a Japanese and Chinese environment:

From the Perspective of Translanguaging

Tao Wang

キーワード：日中バイリンガル、二言語混用、トランスランゲージング

1. はじめに

バイリンガル環境で育つ幼児は日常的に二言語を使っている。同じ相手に対する同一場面においても混用は見られ、一つの発話文の中で二言語を混用することもある。本稿はこの現象について考えるものである。幼児がなぜ、どんな状況で、何のために二言語を混用するのかの理解が進むと周囲の人々によるバイリンガル幼児の発達環境の整備につながる。

本研究では、中国語母語話者の両親のもとに日本で生まれ育った幼児（仮名：「小花」^{シヤオホワ}）の3歳0か月から3歳11か月に至る時期の母親との会話場面における二言語の使用状況を録画・観察する。対象児の発話文から、一文の中に二言語混用の見られるものをまず量的に分析する。そして、その二言語混用の目的に注目し、バイリンガルの研究におけるトランスランゲージングという新たな概念の視点から、目的別に分類する。最後に、今回の観察では現れなかったものについても検討し、バイリンガル幼児一般の二言語混用の目的についての仮説を提示する。

2. 先行研究

ここではまず、バイリンガルの二言語混用に関する先行研究をマイナスのものとプラスのものに分けてまとめる。次に、本研究で用いるトランスランゲージングについての先行研究をまとめて示し、同じ現象を指して使われてきたコードスイッチングとトランスランゲージングとの言語観の違いを整理する。

2.1 二言語混用の価値評価

二言語混用について従来の研究では否定的に捉えるものが多かった。例えば、米田（1999）は、

二言語を併用する個人（幼児ではなく成人）に注目し、先行研究をまとめた結果、二言語併用は、個人をはじめ社会や文化に混乱を及ぼす可能性があり、混用しないのが理想だと論じている。また、高橋（2004）は、日本語と中国語の同時発達バイリンガル幼児が二言語を使い分けるために最も重要なことは、親が「一貫してモノリンガルコンテキストを貫くこと」だと述べ、二言語混用は矯正の対象であると考えていることが読み取れる。そして、李（2011）は、日本語と韓国語の同時バイリンガル幼児の言語習得過程を観察して、対象児が韓国語を使う時に語幹に韓国語、活用語尾に日本語を使ったりすることを報告し、これらを日本語からの干渉による「誤用」とみなしている。

一方、近年外国語教育の現場からは二言語を混用することの利点を挙げる研究が増えている。例えば、田崎（2007）は、大学院生の留学生と日本人学生による日本語でのグループディスカッションを観察し、日英両語の混用が含まれるやりとりを分析した。その結果、留学生は適当な日本語がみつからない時に英語で日本人学生に質問し、日本人学生が英語で答える場面が観察され、このことによって相互理解が促され話題が発展したことを積極的に評価している。また、村端（2021）は、小学校の英語の授業を観察し、指導者による授業中の日英両語の混用について、トランスランゲージングの視点からその有用性を分析した。児童にとって馴染みのある日本語を挿入しながら英語を教えることで授業の進行がスムーズになり、英語の基本表現への親しみを促進したり、児童との心理的な距離を縮めたりする効果があると指摘している。

2.2 トランスランゲージングとは

近年、バイリンガリズムの研究において、**Translanguaging**（以下、トランスランゲージング）という新たな概念が導入されている。本研究はこの概念に基づくものである。トランスランゲージングという用語の起源について、多くの先行研究で言及されているが、英訳者である Baker（2021）による説明は以下の通りである。

トランスランゲージングという用語の起源を明らかにしたのは Colin Baker（2019）、Lewis et al.（2012）である。もともとは、Cen Williams（1994）が 1980 年代後半に、ウエールズ語で「trawsieithu」と造語した。これは、教室の同じ授業内で二つの言語が計画的かつ体系的に使用される現象を示したものである。最終的に、Colin Baker が Cen Williams の要望に応じて、「translanguaging」と英訳した。（Baker, 2021, p.108）[王桃訳]

2.2.1 トランスランゲージングの定義

トランスランゲージングの定義について、加納（2016）は、言語だけではなく、音声や画像、絵文字などを含んだ「全ての記号システム」を、境界線を取り払って使う状態を規範とする概念であると述べ、猿橋・坂本（2020）は、「x 語や y 語といった言語の範疇にとらわれずに、過去の経験を通して蓄積された言語レパートリーを言語資源として用い、相互作用の中で意味づけを行い、言語資源を更新していくという言語実践である」（p.27）と述べている。そして、湯川・加納（2021）は、言語だけでなく、視覚、聴覚、触覚を含む情報をすべて使って意味生成・理解を行う概念であると解釈している。つまり、トランスランゲージングは動的な言語現象を説明する概念であるという。

筆者はバイリンガル幼児の二言語混用を数年間にわたり観察してきた。その観察によると、幼児の

場合、顕在化しない資源も活用しながら日本語や中国語といった個別言語を超越しているように思われる。本研究では、トランスランゲージングを、バイリンガル幼児が、自らの持つすべての言語資源と非言語資源で形成されたレパートリーに、理解、考え、感情などを含めて、オリジナル言語を作り出し活用する一連の過程と捉える。

2.2.2 コードスイッチングとトランスランゲージングの違い

二言語混用については、従来コードスイッチングの考え方から論じられることが多かった。ここで、この二つの概念の言語観の違いを確認しておく。コードスイッチングとトランスランゲージングは同じ現象を対象とするが、言語観が異なる。コードスイッチングは、バイリンガルの脳内に二つの独立した言語システムが存在すると考える言語観である。言語システムをL、それに対応する言語の要素をFとして、両者の違いを表したのが図1、図2である。バイリンガルはL1とL2二つの言語システムを持ち、二言語の使用はこの二つの切り替えによって行われるという言語観がコードスイッチングである。混用はコードスイッチングがうまくいかなかったエラーとなる。一方、トランスランゲージングの言語観では、図2のように、すべての言語要素（F）が統合され、一つのレパートリーとして存在していると考ええる。

図1 コードスイッチングの言語観

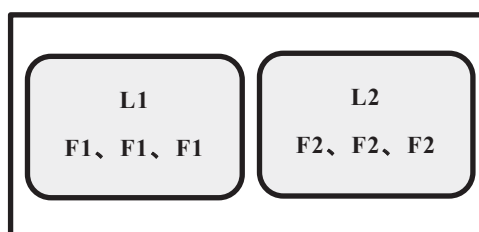


図2 トランスランゲージングの言語観



注 García & Li, 2014, p.14 を参考にして作成

García & Li (2014) は、バイリンガルの言語行動を、「社会的に構築された二つの言語の特徴を総括して、一つのレパートリーとみなし活用すること」（王桃訳）と捉えている（p.2）。つまり、トランスランゲージングは、「言語の間の境界線を超越するだけでなく、すべての言語資源を一つのレパートリーとして捉える」言語観である（加納, 2016；高, 2016；猿橋・坂本, 2020；丸山, 2021；湯川・加納, 2021 など）。

2.2.3 先行研究におけるバイリンガルによる言語混用の目的

バイリンガルによる言語混用の目的について、馬・謝（2017）は社会言語学の視点から成人の交際スキルに焦点を当て、「もう一方の言語を補う」「補足・説明」「心理的な距離を調整する」「話者のステータスを強調する」「ファッションとユーモアを表す」「婉曲に拒否を表す」といった6項目を挙げている（王桃訳）。Baker（2021）はこれまでの先行研究をまとめ、バイリンガルが同時に二言語を使用する目的¹⁾を14項目示している。それは、「強調」「代用」「等価性のない概念」「問題解決」「補強」「明確化」「アイデンティティ」「会話報告」「割り込み」「緊張を和らげたり、ユーモアを注入したりする」「態度や関係の変化」「排除」「話題の変化」「模倣」（王桃訳）である。

3. 研究方法

3.1 研究目的

田崎（2007）、村端（2021）が成人による二言語混用を積極的に評価するように、幼児の言語混用にも積極的な意義が見出せるのではないだろうか。中島（2016）はバイリンガル幼児の2歳から4歳の時期を、大人との関わりの中で言葉を使って感情を表現し考えを形成する時期であると説明している（p.25）。そこで、本研究では、対象児の3歳0か月から3歳11か月までの12か月間における母親との言語使用実態を対象とし、幼児の二言語混用を観察する。馬・謝（2017）、Baker（2021）はバイリンガルが同時に二言語を使用する目的を挙げているが、管見の限り幼児に特化したものはない。本研究の目的は、バイリンガル幼児による二言語混用の目的を明らかにすることである。

3.2 研究対象児について

3.2.1 調査までの言語環境

対象児は、中国人の両親のもと日本で生長した3歳の女兒である。筆者は小花と同居している母親である。以下（表1）は小花の調査までの言語環境を示す。

表1 調査までの言語環境²⁾

環境		誕生～2歳1か月	2歳2か月～2歳11か月
家庭内	父親からの話しかけ	中国語	日本語＋中国語（8:2）
	母親からの話しかけ	中国語	日本語＋中国語（7:3）
	両親間	主として中国語	主として中国語
	音楽	中国語	日本語＋中国語（9:1）
	テレビ	中国語	中国語
家庭外	保育園	—	日本語 月～金（9:30～16:00）
	親戚とテレビ電話	中国語 週2回 30分程度	中国語 週2回 30分程度
	近所の友人	中国語 週3回 2時間程度	中国語 週1回 3時間程度

小花の2歳1か月までの言語環境は、主として中国語であった。2歳2か月で日本の一般的な保育園に通いはじめてから、日本語の使用が飛躍的に増えた。早く保育園に慣れるよう、主に中国語で会話をしていた両親も、対象児への話しかけを日本語中心に切り替え、家庭内の日本語の使用の割合が増加した。

3.2.2 観察期間の言語環境

調査期間は対象児が3歳0か月から3歳11か月までである（表2）。

表2 観察期間の言語環境²⁾

環境		言語
家庭内	父親と話す言語	日本語+中国語 (6:4)
	母親と話す言語	日本語+中国語 (5:5)
	両親間の言語	主として中国語
	音楽	日本語+中国語 (4:6)
	テレビ	日本語+中国語 (3:7)
家庭外	保育園	日本語 月～金 (9:00～18:30)
	親戚とテレビ電話	中国語 週2回 30分程度
	近所の友人	中国語 月2～3回 3時間程度
	ベビーシッター	日本語 月4～6回 毎回3時間程度

この間、対象児は保育園の生活に慣れ、両親からの日本語での話しかけは少なくなり、日中両語の使用はほぼ1対1になった。そして、保育園にいる時間と日本人のベビーシッターによる保育時間がかなり増えたことで、この時点では、就寝中を除けば、日本語環境で過ごす時間が一日の大半を占めるようになったと言える。

3.2.3 親の日本語能力とストラテジー

対象児の母親は日本の大学を卒業し、在日8年目である。父親も、日本の大学を卒業し、本調査の時点で在日15年目で、両親とも日中両語が自由に使える。対象児とのコミュニケーションにおいては、会話続行を優先し、対象児の二言語混用を積極的に修正しない方針を取っている。誤用が生じた場合は、状況に応じて適宜説明したり、対象児に合わせて言語を切り替えたりすることもある。

3.3 研究内容

本研究では、対象児と母親の会話場面を録画・記録し、分析する。対象児の負担を軽減するため、録画は1か月に1回30分程度にとどめ、カメラを少し離れた場所に設置して、自然な会話場面を撮ることを心がけた。対象児が絵描きや工作に集中したり、ごっこ遊びで同じ動作（物を投げたりなど）を繰り返したりした時は発話が少ないため、発話が活発に行われている場面を10分間選択し、文字化したテキストを作成した。客観的なデータを得るために、10分間の場面は、以下の規則にしたがって選択した。

- (1) 時間は継続した発話10分間または複数の発話の合計で10分間とする。
- (2) 内容の豊かなデータを得るために、対象児の発話が活発的な時間帯を選択する。
- (3) 1分間以上発話がない場合（例えば、絵描きや工作に夢中になっている時）は、明記したうえで、適宜延長する。または次の発話に飛ばす。
- (4) 継続的に1分間以上、同じ動作とフレーズをずっと繰り返す場合（例えば、ピッチングゲームする時）は、時間を適宜延長する。
- (5) 録画中何らかの理由で中断になった場合は、後日、追加で録画する。

そして、選択した録画を文字化する方法については、以下の通りとする。

- (1) 各会話場面や状況を明記する。意味が読めない場合は、行動などを明記する。

- (2) 会話内に特定できる情報が現れた場合はすべて記号で表す。
- (3) 日中同形語の場合、発話文において、中国語は「(中)」をつけ、日本語はひらがなで表す。
事例説明において、中国語は“ ”、日本語は「 」で表す。
- (4) 聞き取れない単語やフレーズは〇〇で表示する。

3.4 分析方法

3.4.1 発話文の分類

発話文は、対象児の発話からまとめた意味が読み取れる文を一文とみなしてカウントする。たとえ文法的に不完全な発話であったり、発音を間違えたり、途中で終わったり、内容を繰り返したりした多少不適切な文³⁾も一文とみなす。それを、日本語、中国語、二言語混用、その他（判別不能や聞き取れないなど）の4項目に分類した。

3.4.2 混用文の抽出

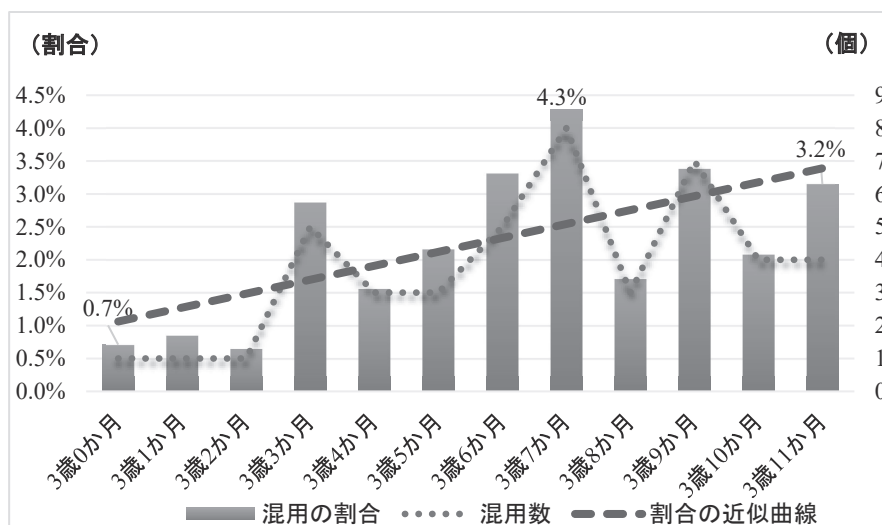
本研究では、上記に述べた要領で文字化したテキストから、対象児の二言語混用の見られる発話文を抽出し、トランスランゲージングの視点に立って、読み取れた目的別に分類した。また、会話の文脈や対象児の日常の言語使用状況と合わせて分析し考察した。

4. 調査結果

4.1 1年間における発話状況と二言語混用の推移

全期間を通じた文単位の発話数の平均の割合は、日本語約 50.4% (983 個)、中国語約 29.8% (581 個)、その他 17.5% (341 個) で、二言語混用は 2.3% (45 個) である。二言語混用の割合は全体としては小さい。文の数は 45 例である。ただ 1 年間の推移 (図 3) に注目すると、増加の傾向が見られる。調査開始時の 3 歳 0 か月には 0.7% (1 例) だったが、8 か月目の 3 歳 7 か月には 4.3% (8 例) に達し、12 か月目の 3 歳 11 か月は 3.2% (4 例) であった。コロナ感染症予防のために、3 歳 3 か月と 3 歳 7 か月の時期に登園を控え自宅で過ごした。この期間は、週 2 ～ 3 回、毎回 3 時間程度で日本人のベビーシッター保育を利用していた。この理由でデータが不規則になった可能性があるが、割合の近似曲線を引くと、増加の傾向が認められる。

図3 二言語混用の1年間の推移



注 コロナ感染症の影響で3歳3か月、3歳7か月は自宅で過ごした期間

バイリンガル幼児の二言語混用は、言語環境と話し相手の混用に対する捉え方と密接に関連しており、対象児は自身の言語環境に基づいて言語を活用する。例えば、母親が一方の言語しか使わない場合、幼児はその言語を主にする可能性が高い。実際に、本調査期間に小花は、日本語モノリンガルに対しては日本語の使用が94% (67 個) から100% (175 個) に増加し、中国語モノリンガルに対しては中国語の使用が75% (62 個) から95% (144 個) に増加した。ここで、対象児の日中両語が自由に使える両親が、対象児とのコミュニケーションで会話続行を優先し、二言語混用を積極的には修正しない戦略を取っていることの意味を確認する。データから、対象児の母親は対象児の言語混用に対して、積極的に修正しないだけでなく、母親自身も二言語を混用していることが観察された。二言語混用について従来の研究では、親が一貫してモノリンガルコンテキストを貫くことで混用を減らすことを提唱する傾向にあった (高橋 2004 等) が、本調査においては親が会話続行の戦略を取ったことで、幼児が自由に言語を選択し活用しえたのではないかと考える。

4.2 混用例から読み取れた目的

全期間で得られた45例を目的別に分類したところ、表3のような5分類の結果が得られた。この5分類について、実例を挙げて分類の根拠を示す。

表3 対象児の二言語混用の目的

問題解決	26 例	感情の表出	15 例
模倣	2 例	話題の導入・転換	1 例
仲間意識の表出	1 例	計	45 例

4.2.1 問題解決

対象児の混用の目的を問題解決と読み取れる 26 例のうちの典型的な 4 例を挙げて示す。

【例 1 店ごっこで遊んでいる状況】

母親： 欢迎光临。欢迎光临。(いらっしゃいませ。いらっしゃいませ！)

小花： …… 〈黙って品物を見ている〉

母親： 小朋友。你要买点什么吗？(お客様。何を買いますか？)

小花： 我要たいこ。(たいこがほしい)

発話番号 22

例 1 は、ある単語やフレーズを A 言語でどう表現するのかがわからない場合に、B 言語の単語やフレーズで代用する例である。小花は、日本語の「たいこ」はわかるが、中国語の“鼓”はわからない。この場合は、日本語の「たいこ」を代用することで中国語の知識不足が解決されたと認められる。

【例 2 店ごっこで遊んでいる状況】

母親： 你要说欢迎光临啊。(「いらっしゃいませ」を言ってね)

小花： 是妈妈卖汤圆。妈妈、卖汤圆作って。(ママがタンユエンを売る。ママ、タンユエンを作って)

母親： はい、わかった。いらっしゃいませー。

小花： はい。卖汤圆ください。(はい。タンユエンください)

母親： 汤圆ください？ オッケー。(タンユエンくださいね？ オッケー)

〈“卖汤圆”は「汤圆を売る」という意味だが、小花は間違えてこれを“汤圆”の意味で使っている〉

発話番号 18

例 2 は、B 言語にはない A 言語に特有な単語やフレーズを話す場合は、B 言語の発話でも A 言語のままを用いる例である。汤圆（タンユエン）は白玉団子のような中国の伝統食品である。日本には存在せず、対応する日本語がない。この場合、小花は日本語での会話にも中国語の“汤圆”を用いて円滑に話すことができた認められる。このような二言語活用について、Baker(2021)は「他方の言語の文化に等価性がない概念を表すために別の言語に切り替える可能性がある」(p.112、王桃訳)と述べている。ほかにも、日本語の発話に中国の親戚の呼称や友達のニックネームが混用される例も観察されている。

例 3 は、A 言語で覚えたある物事を B 言語で説明するのが難しい場合に、A 言語で説明したりすることで問題解決を図った例である。

【例 3 ブロックで遊んでいる状況】

母親： みどりください。

小花： みどり？

母親： みどりください。緑色（中）ね。（みどりね）
小花： 緑色（中）、みどり？（みどり、みどり？）
母親： もうちょっと考えてね。この箱にあるじゃない？みどり。
小花： みどり、緑色（中）。（みどり、みどり）
〈言いながら探している〉
小花： みどり？
〈みどりのブロックを出した〉
母親： 嗯嗯。对了嘛。（うんうん、そう）

発話番号 53

例3は、母親が「みどりください」と言ったところ、小花は「みどり？」と聞きながらどんな色なのか考えているように見られた。母親が日本語で復唱し、もう一度中国語で復唱した。この際、対象児は中国語“綠色”を復唱して日本語の「みどり」に訳した。母親に箱にあると教えられ、日中両語を唱えながら箱からブロックを探し出した。この行動は、対象児が中国語を日本語に訳して問題を考え日本語と中国語を繰り返して解決をしたものと思われ、そして、これはすぐに緑のブロックを見つけ出した結果によって証明されていると考えられる。

【例4 ブロックで遊んでいる状況】

母親： 还想要一个白色。（もう一つ白いのがほしい）
小花： 白色（中）？ 没有。给你ピンク吧。（しろ？ない。ピンクをあげるね）

発話番号 53

例4は、二言語混用で表現の正確さ、簡潔さを図る例である。母親にもう一つ白いブロックがほしいと言われたところ、対象児は白はないからピンクのブロックを渡そうとしている。ただし、「ピンク」に相当する中国語は“粉色”と“粉红色”の二つある。どちらを使ってもかまわないが、選択に迷う⁴⁾。ここでは、対象児はそれを避けるために、迷う必要のない日本語の「ピンク」に切り替えて問題を解決したと考えられる。

4.2.2 感情の表出

A言語での発話にある単語やフレーズをB言語で繰り返したり、ポイントの部分をB言語に切り替えたり、B言語の文法的特徴を活用したりすることで、強調、明確化、確認、願いや希望などの感情を表出するものをまとめた。以下が15例のうちの4例である。

【例5 ブロックで何を作るのかについて話している状況】

母親： 怎么玩？（どうやって遊ぶ？）
小花： 做一个滑り台。（滑り台を作ろう）
母親： 做一个什么东西？（何を作るの？）
小花： 滑滑梯。（滑り台）

【例 6 友達と何で遊んだのかについて話している状況】

母親： 哥哥和你一起玩什么啦？（お兄さんと何で遊んでいたの？）

小花： 就是ティッシュ、还有纸巾。（ティッシュ、あとはティッシュだよ）

母親： 什么？（なに？）

小花： 纸巾。（ティッシュ）

母親： 酒精（中）？（アルコール？）

〈母親にはアルコールの中国語の発音に聞こえた〉

小花： ううん、ティッシュ。

母親： 啊、纸巾。玩纸巾了啊。（ああ、ティッシュ。ティッシュで遊んでいたね）

発話番号 17

例 5 と例 6 は、強調や明確化のために、ポイントの部分进行他の言語（ここでは日本語）で表現した例である。例 5 は、小花の母親が中国語で「怎么玩？（どうやって遊ぶ？）」と聞いたところ、対象児は「做一个滑り台（滑り台を作ろう）」と中国語の中に日本語の「滑り台」を挿入した。普段母親との会話では中国語の“滑梯”を使っているが、この場合は、自分が作りたいものを強調するためにあえて日本語の「滑り台」を使用した可能性が高く、感情の表出とみなされる。

例 6 は、母親が「お兄さんと何で遊んでいたの？」と日本語で聞いたところ、小花は日本語でティッシュと答えた後、中国語で繰り返している。Baker（2021）の「別の言語でのフレーズやパッセージの繰り返しも、ポイントを明確にするために使用される場合がある」（p.112、王桃訳）の説明に当てはまると考えられる。なお、母親の続きの中国語での質問に対して、小花は日本語で説明し、再度ポイントを明確にした。

日本語の助詞や終助詞などを中国語での発話に「混用」して気持ちを伝える例（例 7）、日本語での発話に強い意志を目立たせる中国語の「混用」（例 8）も観察された。

【例 7 ベビーシッターの先生と遊びに行った時の話をしている状況】

母親： 今天老师带你去哪里玩了？（今日先生はどこへ遊びにつれて行ってくれたの？）

小花： 老师ね？（先生ね？）

発話番号 44

普段、ベビーシッターのことを「先生」と呼んでおり、例 7 は、母親の質問に対して、対象児は中国語での発話に日本語の終助詞「ね」を付加して確認しているのが読み取れる。

【例 8 ボールを投げて遊んでいる状況】

小花： よーい、ドン。あー。

〈ボールがゴールに入らなかった〉

母親： 来、对着这边吧。免得跑老远了。（おいで、こっちに向かってしよう。そうじゃないともっと遠いところに行っちゃうよ）

母親： ここ、おいで。
小花： よーい、進！（よーい。入れ！）
〈母親のところに行き、ゴールに向かってボールを入れようとしている〉
母親： ブブー。ママの番。ママの番。

発話番号 11

中国語の“進！”は一文字で強い意志を簡潔に表し、特に、ゲームや試合でよく使われる。例 8 では、小花がボールをゴールに入れようとして一度失敗したため、2 回目は気持ちが強まったと思われる。この状況で、日本語での発話にも中国語の“進！”を混用して意思や希望を強く表したと見られる。

4.2.3 模倣

子どもは常に模倣しながら学習していくと言われる。例 9 と例 10 はその例である。

【例 9 虹を描いている状況】

母親： これ。これ何っていう？
小花： うん。にじ。
母親： 中国語では？
小花： 嗯。彩……（えっと。に……）
母親： わあ。よく知っているね。彩虹（中）。
小花： きれいな彩虹（中）だ。（きれいな虹だ）

発話番号 28

【例 10 何のおもちゃで遊ぶかについて話している状況】

母親： 然后跟妈妈玩一个什么玩具呀？（では、ママと何のおもちゃで遊ぶ？）
小花： うん。きょうりゅうの玩具（中）。（うん。きょうりゅうのおもちゃ）
小花： ね、皆さん。あのさ。集会所で並んで、シューするの。
〈おもちゃの恐竜に向かって話している〉

発話番号 40

例 9 は、母親が「にじ」を指す中国語を聞いたところ、小花は正確な言い方がわからないことが確認された。そこで、母親がさりげなく中国語で“彩虹”ということを教えた。すると、小花はその中国語を模倣した。ここでは、学習していく様子が明らかである。例 10 は、普段母親がおもちゃについては中国語の“玩具”を使っているから、小花は身近な言葉として母親を模倣して日本語での文脈にもそのまま再現したと考えられる。

4.2.4 話題の導入・転換

本研究で読み取れた話題の導入・転換の例は以下（例 11）である。

【例 11 対象児が絵本（うさぎがリンゴを取る物語）を説明している状況】

母親： 那你讲一个小兔子的故事吧。（じゃ、うさぎちゃんの物語を教えてね）

小花： 小兔子。你どこに行くの？ ああ、リンゴあった。（うさぎちゃん。あなたどこに行くの？ ああ、リンゴあった）

母親： 嗯。好好讲。（はい。ちゃんと言って）

小花： は！ こうやってー。

〈手でリンゴを取る動作〉

発話番号 14

例 11 は、対象児が絵本を読んで、うさぎがリンゴを取る物語を母親との会話に導入している。中国語で「那你讲一个小兔子的故事吧。（じゃ、うさぎちゃんの物語を教えてね）」と話しかけている母親に対して、対象児は最初は中国語で話しているが、物語の開始部分「どこに行くの」からリンゴを発見して手に入れるまでを日本語に切り替えている。つまり、中国語の文脈に日本語で物語の話題を挿入したと認められる。

4.2.5 仲間意識の表出

対象児が二言語を活用することで友情や仲間意識を示した場面も観察された。例 12 は仲間意識の表出の例である。

【例 12 対象児の友達について話している状況】

母親： 今天白天和谁一起玩的？（今日誰と遊んだの？）

小花： 嗯、J 哥哥。（うん、J お兄さん）

母親： J 是弟弟。今天一起玩的是 H 哥哥。（J はおとうとだよ。今日一緒に遊んだのは H お兄さんだよ）

小花： うん。大きな哥哥やらなかった。（うん。大きなお兄さんとは遊ばなかった）

母親： うん？

小花： J 哥哥って。（J お兄さんだよ）

母親： J 吗？（J のこと？）

小花： そう。

母親： ううん、不是。J 是弟弟。（ううん、違う。J はおとうとだよ）

〈H、J は小花の友達の名前〉

発話番号 29

“哥哥”とは、中国語で「兄」や「年上の男の友達」のことを指す。H 児は対象児の友達なので、ここでは「年上の男の友達」を意味している。ここで“哥哥”に置き換えることで、日本語の「お兄さん」では表せない親しみと仲間意識を表したのではないだろうか。

5. 考察と結論

5.1 対象児の二言語混用の考察

この1年間における対象児の発話を観察すると、内容の豊富さ、文法の正しさ、文の長さなどから、日中両語の能力の発達が認められる⁹⁾。また、4.1で述べた二言語混用の発話文の割合の推移から、対象児は成長に伴い、二言語混用が減少するどころか、増加していることが確認された。言語能力の向上と同時に混用が徐々に増加していることから考えると、対象児の二言語混用は、言語能力の不足や言語干渉という消極的な原因によるものだけでは説明できない。言語発達に伴う積極的な言語使用でもあることが認められる。このことは、バイリンガル幼児の言語発達とコミュニケーション能力の向上につながると考えられる。

4.2では、観察された対象児が二言語を混用する例を、トランスランゲージングの視点から分析し、目的別に分類した。その結果、「問題解決」「感情の表出」「模倣」「話題の導入・転換」「仲間意識の表出」の5項目に分類することができた。

以上から、バイリンガル幼児の二言語混用は、幼児が二言語で表現力を発揮して他人に理解されることを促進する言語活用であると考ええる。バイリンガル幼児は、二つの言語の特徴や表現のニュアンスを習得し、混用の形を通して自身の意図をより正確に伝えることができる。すなわち、バイリンガル幼児の二言語混用は、混乱や問題行動ではなく、円滑なコミュニケーションのための手段であり、建設的な言語行動と言える。この柔軟な言語使用は、バイリンガル幼児のコミュニケーション能力の発展にも寄与していると考ええる。

5.2 バイリンガル幼児の二言語混用の目的についての仮説

今回の観察から読み取れたのは上記の5分類であった。さらに、その周辺の幼児の観察等を通して推測し、今回の観察では現れなかった「引用」「場面のコントロール」の2項目を加え、本研究では、結論として、バイリンガル幼児一般の二言語混用の目的は以下の7項目であるとの仮説を提示する。以下、この7項目について説明する。

(1) 問題解決

会話中の問題を解決する。具体的には、①ある単語やフレーズをどう表現するかわからない時は別の言語で代用することや、②B言語にはないA言語に特有な単語やフレーズを話す場合はB言語の中にA言語を挿入して用いることを指す。例えば特有の地名や人の呼び名を表す時。また、③A言語で覚えたある物事をB言語で説明できず、B言語の文脈にA言語を挿入することもある。

(2) 感情の表出

会話中のA言語の単語やフレーズをB言語で繰り返したり、ポイントの部分をもう一方の言語に切り替えたり、A言語での発話にB言語の文法的特徴を活用したりすることで、強調、明確化、確認、願いや希望などの感情を表出する機能を果たすことを指す。

(3) 模倣

幼児が周囲の仲間や大人の直前の言語行動をそのまま再現することを指す。模倣しながら遊ぶことや常に模倣しながら学習していくことは幼児に特有なものであると考えられる。

(4) 話題の導入・転換

A 言語で話している中で新しい話題や B 言語の関連の高い話題について、B 言語に転換したりすることを指す。

(5) 仲間意識の表出

友情、家族や団体意識などを示すために、言語を選択する。例えば、アメリカで暮らす日英バイリンガルの幼児が、幼稚園では英語で話すが、同じ日英バイリンガルの仲間と公園で遊ぶ時は日本語で話すといった場合、幼児たちは、それぞれのグループでのメンバーシップを意識していると言える。

(6) 引用

A 言語での会話の中に B 言語で聞いたことを説明する時に、聞いた話を直接引用することである。このようなことは、幼児によくある。例えば、幼稚園で聞いた先生の日本語を中国語の会話の中にそのまま挿入するというようなことである。

(7) 場面のコントロール

意図的に会話中に別の言語を挿入して緊張を和らげたり、ユーモアを加えたり、気分を変えたりする。相手に合わせて意識的に調整したり、言語や文体を切り替えたりすることで、会話の態度や距離を調整したりする。例えば、日本にいる日中バイリンガル幼児が親と中華物産店に買い物に行った時、幼児が店員を喜ばせて飴をもらおうとして、中国語であいさつしたり、中国の呼称で呼んだりする。この場合は、意図的に中国語を用いて、店員との交流場面を親しみやすいように調整したと認められる。

6. 終わりに

本研究では、二言語混用は成長に伴い増加し、これが幼児の言語やコミュニケーション能力の発達に有用な現象であることを確認した。バイリンガル幼児はコミュニケーション目的を達成するために、積極的に二言語混用を行っている。この観察を通して、バイリンガル幼児の二言語混用の目的を7項目とする仮説を提示した。

二言語混用は、バイリンガル幼児の言語発達やコミュニケーション能力の促進に有用で、周囲の成人の受容的な態度が重要である。バイリンガル幼児に接する周囲の人々がこのことを自覚することで、社会環境の整備につながることが期待される。筆者は、親が二言語を柔軟に使いこなすスキルを持って子どもに自在にコミュニケーションをさせることを推奨する。また、周囲の人々がバイリンガル幼児の二言語混用をポジティブに受け入れてサポートすることが望ましいと考える。

グローバル化による「人の国際移動」の展開に伴い、今後世界にバイリンガル幼児が増加すると予測される。この新たな社会背景において、保育者や教育者などが異なる言語環境で成長する幼児の様々な言語行動を理解し、受け入れ、尊重することで、幼児たちがのびのびと成長し保護者が安心できる成熟した社会環境を整備することができる。

最後に、本研究の分析上の利点と限界について言及する。対象児は筆者の実子であるため、日常的な観察が可能で、考察の際に参照する情報が多いことは利点と言える。しかしその反面、解釈上の客観性については限界があることは否めない。

謝辞

本研究は母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2023年度研究大会の口頭発表をもとに修正を加えたものである。当日に有意義なコメントをくださった方々に感謝申し上げます。また、指導教員の河路由佳先生には、修士論文から一貫して丁寧な指導を賜りました。記して謝意を表します。

注

- 1) Baker (2021) に示されている 14 項目の原語は以下の通りである。
 (1) Emphasis、(2) Substitution、(3) Concepts without equivalences、(4) Problem solving、(5) Reinforcement、(6) Clarification、(7) Identity、(8) Reported speech、(9) Interjections、(10) Ease tension and/or inject humor、(11) Change of attitude or relationship、(12) Exclusion、(13) Change in topic、(14) Imitation
- 2) 両親からの話しかけにおいて、日本語と中国語の比率は、両親が撮影したビデオをもとに、話しかけ文の数をカウントして算出した。音楽とテレビの比率は、ある 1 日のプログラムにおける再生時間の長さをもとにして計算した。
- 3) 不適切な文とは、①文法的に不完全で非文法的な構文(例: チョキチョキお弁当箱)、②発音や単語の間違い、途中で終わること、発話の繰り返しによっても不自然さが生じた文(例: 床掃除機する)、③ 5 秒以上の沈黙や話題の変更、口調の変化が生じた発話文(例えば、戻れない。ああ、できた)である。
- 4) 対象児が中国語の“粉色”と“粉红色”に迷った一例:
【母親と何を着て公園に行くのかについて話している】
 小花: 我今天穿这个裙子粉色的去公园吗? (今日はこのピンク色のスカートで公園に行っていく?) 母親: うん。小花: 粉红色? (ピンク色?) 母親: 不是… (違う…) 〈小花が焦って母親の会話を遮った〉小花: じゃ、何色? 母親: 色じゃなくて、公園に行くでしょう? ズボンの方がいいじゃない? 小花: 嫌だ。スカートがいい。
- 5) 3 歳 0 か月、一語文や二語文が多かった: 「いいよ / だめ」「有 (ある)」
 3 歳 6 か月、複文が使えるようになった: 「よく聞いて。バスだよ、バス」「小鸭子来了 (アヒルが来た)」
 3 歳 11 か月、重文が使えるようになった: 「虎さんははちみつ食べれるよ、あとプーさんもはちみつ食べれる」「你看、小花这样的做冰淇淋 (見て、小花はこうやってアイスクリームを作る)」

引用文献

- イ スン アン
 李善雅 (2011) 「同時バイリンガル幼児の言語習得過程に見られる二つの言語の『混合』と『干渉』」『社会言語科学』13 (2), 88-96.
- 加納なおみ (2016) 「トランス・ランゲージングを考える— 多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』12, 1-22.
- コウ チョ
 高千叶 (2016) 「JSL 高校生にとって複数言語を使用する意義とは—学習場面における複数言語のやりとりに着目して—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』7, 24-44.
- 猿橋順子・坂本光代 (2020) 「トランスランゲージングの遂行性—国際的なトークショーのディスコース分析を通して—」『青山国際政経論集』105, 25-54.
- 高橋朋子 (2004) 「日中同時発達バイリンガル幼児の 2 言語混合」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』8, 17-36.
- 田崎敦子 (2007) 「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響—多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に—」『異文化コミュニケーション研究』19, 85-99.
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法—12 歳までに親と教師ができること—』(pp.23-27) アルク
- 丸山真純 (2021) 「トランスカルチュラル・コミュニケーションとしての異文化コミュニケーション, トランスランゲージングと (マルチ) リンガ・フランカとしての英語 (1) —オンライン多文化共修の再概念化に向けて—」『経営と経済』100 (4), 263-299.
- 村端佳子 (2021) 「小学校英語の授業における指導者の英語使用について—コードスイッチングの視点からトランスランゲージングの視点へ—」『宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集』8, 96-107.
- 湯川笑子・加納なおみ (2021) 「『トランス・ランゲージング』再考—その理念、批判、教育実践—」『母語・継承語・

バイリンガル教育 (MHB) 研究』 17, 52-74.

米田佐紀子 (1999) 「二言語併用者個人についての研究ーWeinreich の Languages in Contact とその後の研究ー」『北陸学院短期大学紀要』 31, 145-157.

Baker, C. (2019). A tribute to Ofelia Garcia. *Journal of Multilingual Education Research* 9, 175-182.

Baker, C., & Wright, W. E. (2021). *Foundations of bilingual education and bilingualism* (7th ed.). Multilingual Matters.

García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.

Lewis, G., Jones, B., & Baker, C. (2012). Translanguaging: Developing its conceptualisation and contextualisation. *Educational Research and Evaluation*, 18 (7), 655-670.

<https://doi.org/10.1080/13803611.2012.718490>

Williams, C. (1994). *Arfarniad o ddulliau dysgu ac addysgu yng nghyd-destun addysg uwchradd ddwyieithog* [Doctoral thesis]. University of Wales, Bangor.

馬劍春・謝婧怡 (2017) 「浅談語碼轉換的社會語用功能 (コードスイッチングの社會語用機能の分析)」『現代語文 (言語研究版)』 01, 79-81.

要 旨

本研究はバイリンガル環境で育つ幼児による一つの発話文の中での二言語混用について考えるものである。本研究では、中国語母語話者の両親のもとに日本で生まれ育った幼児（仮名：「小花」^{シャオホワ}）の3歳0か月から3歳11か月に至る時期の母親との会話場면을観察し、対象児の二言語混用の現れる発話文が全体に占める割合は2.3%と小さいものの、発達につれて増加傾向にあることを指摘した。また、対象児の二言語混用の目的についてトランスランゲージングの視点から考察し分類することを通じて、バイリンガル幼児の二言語混用は発達に伴う積極的な言語行動であり、円滑なコミュニケーションに役立つという見解を示した。最後に、バイリンガル幼児の二言語混用の目的について、「問題解決」「感情の表出」「模倣」「話題の導入・転換」「仲間意識の表出」「引用」「場面のコントロール」の7分類とする仮説を提示した。

Abstract

This study aims to examine the mixed use of two languages in the speech of a young child growing up in a bilingual environment. The study observed conversations between a young child, born and raised in Japan (pseudonym: Xiaohua), and her Chinese-speaking mother from 3 years and 0 months to 3 years and 11 months. It was noted that although the proportion of mixed language expression in this young child's speech is very small, only 2.3%, this proportion often increases with development. Additionally, from the perspective of translanguaging, a survey and classification were conducted to explore the purposes behind this young child mixing two languages, indicating that languages mixing is a positive linguistic behavior that accompanies development and contributes to smooth communication. Finally, seven hypotheses are proposed regarding the purposes of bilingual young children mixing two languages: "problem solving," "emotional expression," "imitation," "topic introduction and transformation," "peer awareness expression," "citation," and "scene control."